Reed

Man is a Thinking Reed.

KANSAI UNIVERSITY NEWSLETTER

THINK × ACT
KANSAI UNIVERSITY

No.29
June, 2012
関西大学ニューズレター
発行日：2012年（平成24年）6月6日
発　行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680／ TEL.06-6368-1121
http://www.kansai-u.ac.jp/

■インタビュー
Willy F. Vande Walle　ルーヴェン大学 教授
◉聞き手　上島 紳一　関西大学副学長（研究推進・国際活動推進担当）総合情報学部教授

画一的な国際化ではなく、多様性と個性、オリジナリティーが大事

大学の国際化とは何か

■リーダーズ・ナウ ―5
在学生　経済学部3年次生
汪　潔(浩)さん
卒業生　株式会社バウ企画 代表取締役
岡田 良樹さん

■研究最前線
効果的な外国語学習法の研究
脳と心を探る―多様な研究アプローチ ―7
外国語学部 ― 竹内 理 教授

遺伝子組み換えによらない不凍タンパク質の研究
氷結晶を制御する不凍タンパク質の実用化 ―9
化学生命工学部 生命・生物工学科 微生物工学研究室
― 河原 秀久 准教授

■トピックス［学内情報］―11
別科・留学生寮併設の関西大学南千里国際プラザ
「共に学ぶ異文化交流」で国際化を推進

留学・国際交流を強力支援
関大から海外へ！海外から関大へ！

■社会貢献・連携事業／地域連携 ―13
文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞
石川 正司 化学生命工学部 教授
冬木 正彦 環境都市工学部 教授

石舞台古墳復元CGムービーを公開 ほか

■関大ニュース ―15
関西大学ウェブムービー第２弾を公開 ほか

■インタビュー

「大学の国際化とは何か」

画一的な国際化ではなく、多様性と個性、オリジナリティーが大事

Willy F. Vande Walle　•ルーヴェン大学 教授

◉聞き手　上島 紳一

• 関西大学副学長（研究推進・国際活動推進担当）
総合情報学部教授

2009年に関西大学名誉博士号を贈呈されたWilly F. Vande Walle ルーヴェン大学教授は、ヨーロッパにおける日本研究の第一人者。本誌の国際化特集にちなみ、国際的に通用する研究と大学のあり方を語ってもらった。聞き手は、本学の研究推進・国際活動推進担当の副学長、上島紳一教授（国際部長）。

◆東洋の文化、仏教に注目

上島　関西大学では2006年に、ベルギーのルーヴェン大学（2011年までルーヴェン・カトリック大学）の歴史ある図書館の中に、関西大学日本・EU研究センターを設置しました。毎年、国際シンポジウムを開催し、隔年に「Japan Week」のイベントを併催しています。Vande Walle先生には、研究面はもとより、同センターの運営面でもご協力、ご指導をいただいております。

2006年春の外国人叙勲において旭日中綬章を授与されたVande Walle先生は、ヨーロッパを代表する日本学研究者であり、その研究対象は広範囲に及んでいます。まず、先生が日本研究の道に進まれたきっかけからお聞かせください。

Vande Walle　私は1960年代に青春時代を送りました。当時の社会には、自分が生まれ育った文化とは異なる方向を求める風潮があり、既存の社会体制を疑問に思う若者も多かったのです。私も高校時代から東洋の文化に対する関心が高まり、それがどれだけ異なった人生観、世界観、人間観、社会観を教示してくれるものであるかを探りたいという思いが、日本に向かうきっかけになりました。

日本はアジアのいろんな思想がたどり着いている国であり、仏教などのインド文化や中国の文化も含めて、面白い文化の形態を示してくれるように思いました。当時、ヨーロッパでは禅に対する関心も高く、日本の古典的な映画もかなり人気を集めていました。私は従来の西洋文化に満足できず、東洋の方に目を向けたわけです。

上島　留学先の京都大学では、仏教史を専攻されたのですね。

Vande Walle　はい。仏教について学ぶうちに、思想よりも仏教の儀式や儀礼を把握する必要があると思うようになりました。実際の文化の営みを理解するには、日々の実践や作法が重要であることを自覚したのです。

◆萬福寺や高野山で仏道修行を体験

上島　仏教の実践的な修行もなさったのですか。

Vande Walle　萬福寺（京都府宇治市）で8日間の大接心に参加し、座禅を組みました。また、密教にも興味をもったのですが、いくら本を読んでもピンとこないので、高野山に行って3週間ほど修行させてもらいました。そのときは何の紹介もなしに、いきなり寺の門をくぐり入っていきました。

上島　全くの飛び込みで？

Vande Walle　そうです（笑）。常喜院というお寺の門が見えたので、玄関まで行き、「ごめんください」と。住職の奥さんが出てこられたので、密教を勉強したい旨を伝えると、「主人に話をして、また連絡します」と約束してくださいました。1週間後に連絡をいただき、僧侶を育成するための専修学院に入れてもらいました。

一応、得度をして、修行に臨んだのですが、ちょっとがっかりしました。なかには、お寺で生まれ育った人たちが僧職を相続するために来ていて、仏教に関する問題意識や求道精神に乏しいと感じたからです。また、私は学者として仏教に関心をもっているが、仏教徒ではないということも自覚しました。その後、私の教え子の一人が高野山大学で修士課程を修了し、本格的に得度し、修行して阿闍梨（あじゃり）になっています。

上島 紳一　関西大学副学長（研究推進・国際活動推進担当）
総合情報学部教授

◆ホンダの通訳者として学術とは別の世界を経験

上島　Vande Walle先生は一時、ヨーロッパ・ホンダ専属の日本語通訳をなさっています。どのようなお仕事だったのですか。

Vande Walle　博士号取得後に帰国した私は、約10カ月間の兵役服務を終え、就職を考えていたとき、ホンダがベルギーに大きな現地法人を設立し、通訳者を探していることを聞きました。面接を受けて採用された私は、1978年10月から3年間、ホンダに勤めました。同時に、大学で非常勤講師として日本語講座1科目を受け持つことになったのです。

それまでの学術の世界と別の世界を経験したことは、とても有意義だったと思っています。私は初めて、実業界とそこで働く人たちに接触する機会を得ました。それは面白い体験でした。ベルギー政府の使節団が日本に来るときは、付き添いとして来日し、ベルギー中央銀行の総裁が日本銀行の総裁と会うときには通訳をさせてもらいました。

上島　当時のホンダに、どのような企業風土をお感じになりましたか。

Vande Walle　そのころは第一世代の人たちが要職に就いておられて、創業時代の雰囲気がまだ残っていました。彼ら自身、本田宗一郎という人は異色の実業家であり、ホンダは従来の日本企業とは違うと主張していました。私は本田宗一郎さんに何

■インタビュー

度かお会いしましたが、頭の回転が速い、実に面白い人で、時には無礼講の振る舞いもされました。

実際に、ホンダの第一世代の人たちは冒険的でした。50年代から60年代初めにかけて、たとえ英語ができなくてもヨーロッパ各地に出向いてビジネスを開始したり、F1（フォーミュラ・ワン）に挑戦して勝利したり。パイオニア精神にあふれていましたね。

◆岩倉使節団の記録から小国主義について考察

Vande Walle　その後、大学の正規の教官になりましたので、ホンダの仕事は辞めざるを得なくなりました。ホンダに勤めていた間に、松尾芭蕉の紀行文を研究し、翻訳しました。そのころは日本の古典的な俳句、俳諧を研究テーマにしていましたが、まもなく歴史的な研究に重点を移していきました。

上島　明治初期の岩倉使節団に関する論考や、日本とベルギーとの国際関係史など、非常に優れた研究だと聞いております。

Vande Walle　岩倉使節団の動向は面白くて、岩倉具視に随行した久米邦武の『米欧回覧実記』は、明治初期に日本がどういうふうに自分を見ていたかを知るうえで重要な史料です。明治初期の日本とその後の日本を比較すると、ものの見方がかなり違っています。欧米各国の特徴を記し、ベルギーについても紙数を割いています。久米邦武が注目するのは、ベルギーは小国ではあるけれども周りの大国に対して十分対応できるような国づくりに成功したという点です。私は、国も時代も自分と異なる人のベルギーに対する見方を面白いと感じ、それが動機になって小国主義についての論文を書きました。

上島　ルーヴェン大学の日本研究のメンバーは、どんな分野の研究をされているのですか。

Vande Walle　日本学科の同僚のDimitri Vanoverbeke（ディミトリ・ファノーヴェルベッケ）は、明治時代から第二次大戦までの日本の法制度を中心に研究しています。ほかに若手の研究者の一人は、戦前の日本の金融制度について、満州や朝鮮、台湾なども視野に入れた研究をしています。また、漫画の研究や日本語の歴史を研究している人もいます。

◆大学の国際化をどのように進めるか

上島　関西大学では現在、世界の62大学と学術交流協定を結び、国際交流に力を入れています。この4月には関西大学留学生別科を開設し、留学生寮も併設して留学生と日本人学生との交流を進めているところです（11～12ページ参照）。

また、外国語学部の全員が1年間海外で学ぶ「Study Abroad」をはじめ、各学部で国際的な広がりを持つ教育を展開しています。グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点」に続いて、文部科学省大学改革支援事業として採択された国際化プログラムも進行しています。例を挙げると、文学研究科の大学院GP「関西大学EU―日本学教育研究プログラム」、教育GPとして商学部の「英語に強いプロアクティブ・リーダーの育成」、全学対象の「ICTを活用した教育の国際化プログラム」など。

大学の国際化とは何か、それをどう推進するかは大きな問題です。ヨーロッパでは、エラスムス計画（ERASMUS：European Region Action Scheme for the Mobility of University Students）が進められていますが、どのような状況ですか。

Vande Walle　エラスムスは、EUが構想を企画したものです。加盟国の人々が互いにそれぞれの言葉、文化、社会などをよく知らなければEUの市民になりえない、という発想が根底にあると思います。最初はEUから資金が提供されましたが、定着するにつれて各大学が自前の資金で対応する方向に向かっているようです。

私どもの大学でもエラスムスに積極的に取り組み、いろんな国と学生交換を実施しています。大陸諸国間の交流は進んでおり、学生はかなりの割合で1学期あるいは1学年、外国で学んでいます。ただし、イギリスは例外で、国の教育予算が少ない分、自分たちで授業料を払わなければならないため、行きたくても行けないのです。

上島　全世界の留学者数は大幅に増加していますが、日本では逆に海外に出る学生の数が減っています。特に米国の大学への留学者数は、最盛期から半減している状況です。近年、日本人学生の「内向き志向」が問題になっています。

Vande Walle　それは不思議ですね。なぜなら、今の日本の街を歩いていると、外国をほうふつさせるような光景ばかりが目につきます。例えば、イタリア料理店やアメリカのファーストフード店など。大阪ステーションシティも外国的な感じでしょう。外国志向が強くて、日本的なものは目にすることができなくなってきている。外国にあやかったものではなく、もっと日本的なものに触れたいのに、悲しいかな、それがだんだん減ってきています。

◆社会全体に融通が利かなくなっている

上島　外国の文化を取り込んではいますが、学生自らが海外へ出ていこうとしないのが問題です。かつてのホンダのような冒険的、パイオニア的精神が見られなくなっています。今、国際化を進めるにあたって、国は語学力とネゴシエーション力を強化する政策を打ち出しています。先生はどうお考えですか。

Vande Walle　もちろん、ある程度まで語学力を身につけておかねばなりません。しかし、国際化というものは、自分の文化を顧みず、もっぱら外を見て外のものを吸収するのみに帰結するという考えではだめです。それが肝心なところです。

なお、これは日本の社会問題だと思いますが、融通が利かなくなっているのではないでしょうか。個人の問題ではなくて、おそらく組織そのものの問題です。ヨーロッパにもその傾向がありますが、もうちょっと融通を利かせるようにしないと、日本が非常に損すると思います。

国際化が進むなかで何もかもすべて一律に、画一的になる傾向が強くなっています。これも私の持論ですが、将来豊かな文化生活を維持するためには、競争の原理だけではなく、ダイバーシティ（多様性）や個性が大事だと思います。

例えば、ヨーロッパの大学では、外国の学生を取り込むため、どこも使用言語を英語に切り替えてきています。ところが、みんな同じことをやってしまうと、10年先には個性の差がなくなり、競合上の利点もなくなってしまいます。むしろ他大学と違うところを生かして、学生が入りたくなるようにする道があると思うのです。日本の場合も固有の文化があるからこそ魅力的であり、よそで全く同じことが勉強できるとなると、日本に来る必要はないわけです。

上島　おっしゃる通りですね。オリジナリティーが大事です。知識基盤社会の中の大学では、オリジナルなものを生み出す教育と研究を進めなければ、誰も引きつけることはできません。常に、オリジナリティーを世界に発信し続けることが重要ですね。

最後に、関西大学をはじめ日本の大学生に、メッセージをお願いします。

Vande Walle　今、地球上の人口は約70億人で、資源は限られています。地球を大事にする姿勢、ものを大切にする態度が望まれます。我々の社会はものを使い捨ててきましたが、俳人の心境になって、小さなものも大事にしないとだめです。

それから、もっと積極的に外国へ出ていきましょう。外国へ出ていかなければ、自国の文化もよく理解できません。何かを理解しようとすれば、それと違うもの、異質なものも理解しなければならず、対照的な思考が必要です。そして、融通の利く人間になってほしいですね。

上島　Vande Walle先生のお話をヒントにして、学生たちには世界に羽ばたいてほしいと思います。本日はどうもありがとうございました。

Willy F. Vande Walle
（ウィリー・F・ヴァンドゥワラ）
1949年ベルギー生まれ。70年ゲント州立大学東洋学部卒業。同大学院で日本学を研究し、72年に来日。大阪外国語大学で日本語を習得した後、73～75年京都大学で日本文化と仏教史を専門的に研究。東洋哲学博士（ゲント州立大学）。77年に国際交流基金を得て京都大学で日本仏教史を研究。78年ルーヴェン・カトリック大学（現ルーヴェン大学）東洋学部日本語学科講師。78年10月から3年間、ヨーロッパ・ホンダ専属の日本語通訳者として活躍。81年にルーヴェン・カトリック大学東洋学部日本研究の主任、89年に同教授に就任。ヨーロッパにおける日本研究および東アジア研究の第一人者であり、2006年春の外国人叙勲において旭日中綬章を受章。09年に関西大学より名誉博士号を贈呈。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ［在学生・卒業生インタビュー］

日本で学び、中国で起業を目指す

経済学部でビジネス会計を学ぶ中国人留学生

◉経済学部３年次生
江 潔（コウ ケツ）（洁）さん

国際化の流れが止まらない現代社会。関西大学のキャンパスでも、多くの外国人留学生が学んでいる。その中の一人、江潔(洁)さんは経済学部外国人学部留学生入学試験に合格し、2012年4月には3年次生となった。ホテルのカフェレストランでアルバイトをしながらビジネス会計を学び、語学にも資格取得にも積極的に取り組む。

高校を卒業するまで、中国の大学に進学するつもりでいた江さん。日本に留学する最初のきっかけは、日本の製品技術の高さに憧れていた父の勧めだったという。日本語が全く分からなかったので、１年半、中国国内の日本語学校に通い、日本語能力検定２級を取得した。留学先は語学学校の友人から「人が優しい」「暮らしやすい」などと聞いて、大阪に決めた。

来阪後も語学専門学校で学び、関西大学の留学生入試に挑戦。経済学部の面接担当教員の前では「中国には日本企業が多い。卒業後日本の企業で働く可能性を考え、経済を勉強したい」と、抱負を語った。入学後は国際部の活動に協力。外国語会話交流会の講師として、日本人学生や留学生に中国語を週に１回、ボランティアで半年間教えた。「質問が多く出て、皆さんがとても熱心なことに驚きました」。中国に対する世界の関心の高さを実感したようだ。

経済学部ではビジネス会計専修に所属し、コストマネジメントについて研究するゼミに参加。なぜ、コストマネジメントかと尋ねると「直感的に『これだ』と感じました」と微笑み、「会計だけを学ぶより、視野が広がると思った」。併せて、日商簿記２級の取得も目指す。「前回、不合格に終わったのが悔しいです。一生懸命勉強しているのだから、それなりの成果を出したい」。来日後、１級を取得した日本語能力検定も「日本企業から高い評価を受けるには、もっと高い得点が必要」と考え、受検し続けている。更に「短期間でも英語圏に留学して実力を高めたい」と、本格的な英語の勉強も始めた。

頑張り屋の江さんには、将来への夢がある。「興味を持っているのは、化粧品です。中国の働く女性はまだあまり化粧をしませんが、状況は絶対変わる。日本の化粧品会社に就職して知識を身につけ、いつか中国で起業したい」。

放課後は、大阪・梅田のホテル内にあるカフェレストランで接客のアルバイトをしている。仕事を通じて多様な日本語が学べるのがメリットだ。「初めは敬語などの言葉遣いに困りましたが、先輩のウェイトレスさんに教えてもらっています。この方は日本のお母さんのような存在です」。「日本のお母さん」の話になると、表情がとても優しくなった。

ECC国際外語専門学校時代のメンバーとお花見

▲江さんが「日本のお母さん」と慕うアルバイト先の先輩と

江 潔（洁）――コウ ケツ
■中国山東省、潍坊市出身。高校卒業後、中国国内の語学学校に１年半通い、日本語能力検定２級を取得後、来日。大阪・梅田の ECC国際外語専門学校を経て、2010年４月、関西大学経済学部に入学。現在は３年次生。日本語能力検定１級取得。趣味は旅行と写真撮影、ショッピング、音楽を聴くこと。

最高の環境で最高のパフォーマンスを

イチロー選手、斎藤佑樹選手など プロ選手のマネジメントを担う

◉株式会社バウ企画 代表取締役
岡田 良樹 さん―法学部1985年卒業―

オリックスでイチロー選手の専属広報を務めた岡田良樹さんが設立したマネジメント会社には、現在、シアトル・マリナーズのイチロー選手、川﨑宗則選手、北海道日本ハムファイターズの斎藤佑樹選手の３人が所属している。普段は選手のインタビューを設定し、見守ることの多い岡田さんに、イチロー選手と斎藤選手のカレンダーを背に語ってもらった。

岡田 良樹――おかだ よしき
■1961（昭和36）年、兵庫県生まれ。85年関西大学法学部政治学科卒業、オリエントリース（現 オリックス）株式会社入社。89年オリックス野球クラブ株式会社（オリックス・ブルーウェーブ）出向。2002年退社、株式会社バウ企画設立。同社代表取締役。

「面白いこと、人を笑わせて楽しませるようなことをしたい。女の子にモテるにはそれしかない（笑）」。こんな思いで、岡田さんは落語大学の門をたたいた。落語大学は、かつて桂三枝さんも芸を磨いた、伝統ある文化会クラブだ。

「落語では、物語を一人で何役も演じて、人の心の中に情景を思い浮かばせるようにしなければなりません。道具は扇子と手ぬぐいぐらいしかなく、想像力に働きかける工夫が必要です。1、2年次生のころは、人前で噺をしても受けないし、自分が出ているビデオを見ても全然面白くなかった。ただ一生懸命覚えたことをしゃべっているだけで、相手のことは一切考えていなかった。一方、プロの落語家はこっちへしゃべりかけてくるのです。情景を思い浮かべさせる間を取ったり、考えさせる時間を与えたりして。そういうことに気づいたのが、学生時代も終わりに近づいたころでした」

岡田さんの芸名は、爪田家珈九（つめたやコーク）。先輩にはずいぶん鍛えられた。夏合宿で夜中に叩き起こされて池で泳がされたり、阪急千里線の電車の中で落語をやらされたり。一種の「しごき」だが、それが社会に出て、特に独立して事業を始めてから役立った。

「あまりの恥ずかしさに叩きのめされましたが、そこで羞恥心を消すことが自我を消す訓練になったと思います。世の中では、自分を消すようにしないといけない場面に出くわします」

岡田さんは、オリエントリース（現 オリックス）の営業職からプロ野球球団に出向し、イチロー選手と出会った。1994年にイチロー選手がシーズン最多安打の日本記録を更新すると、その翌年から専属広報を務めた。イチロー選手は2001年からアメリカに活躍舞台を移したが、岡田さんも2002年に退社し、自ら会社を設立。プロスポーツ選手がプレーに集中できるよう、幅広いマネジメント業務を行っている。岡田さんは、イチロー選手が成長し、頂点を極め、前人未到の域に達しつつあるのを身近に見てきた。そのイチロー像は？

CASTING
MANAGEMENT
MERCHANDISE

「すごい人ですよ。私より12歳年下なのですが、学ぶことがいっぱいあります。春から秋にかけて7、8カ月の間、野球のみで、遊び事は全くしない。大リーグは連戦が多く、休みをもらう選手も少なくないのに、彼は休まない。そのかわり、体のケアに対する意識はすごい。18歳のころから21年間、ずっと同じことを繰り返している。名声もお金も手に入っていろんなことができるのに、なおかつ野球をなめずに、いまだに同じゲームはないと言って、日々のゲームで1点を取ることに、真剣に向き合っています」

イチロー選手のように、海外で成功するための条件は？

「私はイチロー選手と川﨑選手の２人しか知らないですが、どちらも覚悟をもって海を渡っています。最初から甘いことを考えずに、自分で退路を断って行っています」

今の仕事で大事にしていることは？

「選手が最高の環境で最高のパフォーマンスを発揮できるようにすることです。ストレスを軽減することも重要です。そのためには、私生活の中に土足で入るのではなく、迎えられて入っていけるかどうかですね。決して華やかなことではないのです」

■研究最前線

効果的な外国語学習法の研究

脳と心を探る——多様な研究アプローチ

外国語学習の過程をデータから探る

◉外国語学部
竹内 理 教授

「英語は不得意だけど、何とかできませんか」、「どうすれば外国語を効果的に習得できるのですか」このような問いを口にする日本人は実に多い。これに対して、外国語学部の竹内 理 教授は、経験や感想からではなく、データから答えを提供しようとしている。脳活動の計測といった理系的手法と、心理学・教育学などを活用した文系的手法を縦横に織り交ぜ、竹内教授は、効果的な外国語学習法を長年にわたり探究しているのだ。

■現地に行かなくても、外国語を習得すること自体は可能

外国語を習得するには現地に行って学ぶことが必要だ、とよく言われます。しかし私自身は若い頃から「果たしてこれは本当なのだろうか、海外に行かなくても外国語は習得できるのではないか」という疑問を抱いていました。この疑問こそが、英語教育学の研究者としての私の原点でした。

「海外に行かなくても外国語は十分に学べる」という仮説を実証するには、まず、そのような事例を探さなくてはいけません。そこで、母国から出ることなく外国語を高度に習得した人たちの例を多数集め、インタビューや質問紙など色々な手法を駆使して、彼らの学習方法の共通点を探りました。すると、確かに共通項がありました。外国語学習成功者は、例外なく「自分の外国語能力のレベルを客観的に把握し、向上するために適切な目標を立て、実行し、どう上達したかを振り返り、そこからまた新たな計画を立て、学習を続ける」という自己調整学習のプロセスを踏んでいたのです。

（竹内教授の著書・左から）
『「達人」の英語学習法—データが語る効果的な外国語習得法とは』（2007年、草思社）
『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究』（2003年、松柏社）

■外国に留学することの本当の意義

——では、留学は必要ないということになるのですか？

「適切な学習法をとれば、日本にいても相当に高いレベルの英語（外国語）運用力を身につけることは可能である」。これが、私のこれまでの研究から得た結論です。しかし、その一方で、外国語学部では「Study Abroad」という学部独自の留学制度を導入しています。外国語学習が現地に行かなくてもできるのなら、なぜ必修で留学をさせるのでしょうか。

私たちは、海外へ行けば外国語が簡単に学べるとか、ネイティブから学ばないと外国語は上達しないとか、そういった根拠のない理由で留学を必修にしているのではありません。実は、留学をしなければ手に入れられないものがあるがため、強く留学を推奨しているのです。それは「自信」、専門的な言葉で言えば「自己効力感」というものです。

もちろん、留学を通して外国文化に実際に触れるということも、とても素晴らしいことですが、それ以上に、「私もやれば（外国語で）～ができる」という自信を留学先で身につけることが大切なのです。この自己効力感は、残念なことに、国内にいてはなかなか身につきません。なぜなら、外国語を使ってそれを感じるための機会が、圧倒的に不足しているからです。具体的な目的をしっかりと持ち、外国の人々と本格的に議論をする機会（表層的な英会話とは違う）が増えれば、「通じないかも」という不安が大幅に減り、「通じるぞ、もっとたくさん話そう」と外国語を使ってのコミュニケーション動機が高まります。すると次は「何をどんなふうに話そうか」と話す内容をよく考えて発信するようになります。こういった良い循環を生み出すために有効なのが、海外留学なのです。

■THINK x FEEL x ACTを提唱

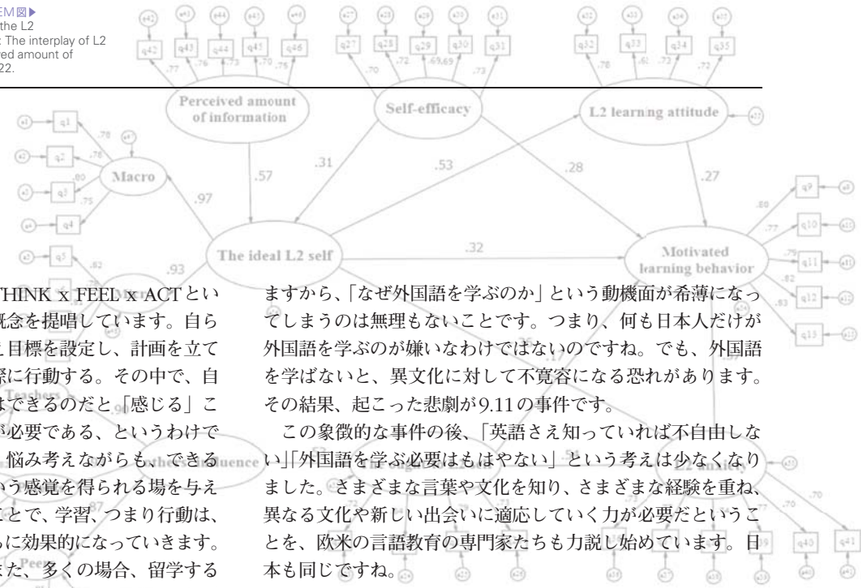
——では、外国語教育に必要なものはなんでしょうか。

私は、関西大学の長期ビジョンに掲げる「考動」に一単語加えた THINK x FEEL x ACT という概念を提唱しています。自ら考え目標を設定し、計画を立て実際に行動する。その中で、自分はできるのだと「感じる」ことが必要である、というわけです。悩み考えながらも、できるという感覚を得られる場を与えることで、学習、つまり行動は、さらに効果的になっていきます。

また、多くの場合、留学すると「身につけた外国語の能力」に対する自信は、一度打ち砕かれます。しかし、現地で多くの人々と深く交流し、「できそうだ」と認識すると、失った自信が蘇り、より強くなることも最近の我々の研究から分かっています。経験を重ねるうちに、自らの能力をしっかりと認識し、その認識に裏打ちされた行動を行うことにより、成功体験が得られて自信がつくというわけです。ですから、経験が必要なのです。

もう一つ、外国語の習得を目指す際には、「外国語を学んでこうなりたい」という理想像のイメージを明確に持つことも大切です。この理想のイメージをしっかりと持つ学習者は、不安が減り、動機が高まり、上達が早くなることも研究結果から分かっています。

理想像、動機、不安など、英語学習に関係する情意面の SEM 図▶
出典：Ueki, M., & Takeuchi, O. (In press). Validating the L2 motivational self system in a Japanese EFL context: The interplay of L2 motivation, L2 anxiety, self-efficacy, and the perceived amount of information. *Language Education & Technology, 49,* 1-22.



■異文化適応力を身につけるための外国語学習

——一般に、最近の大学生には留学したがらない人が多いようですが。

外国語学部の学生など、外国語や海外の文化に強い憧れを抱くものを別にすれば、確かにそうですね。留学希望者や海外勤務希望者は減っており、外国語や外国文化は、今や憧れの対象ではなくなっています。現在の日本では、外国語学習は「嫌だが、せねばならない義務」になっているのです。ある調査で、全国の中学2年生に「嫌いな教科は」とアンケートを採ると、「英語」と答える子供が一番多いという結果が出ているほどですから。

一方、自国の言葉ではなかなか有益な情報を得られない国の人々にとっては、外国語を学ぶことは知識の扉を開くための大切な機会であり、素晴らしい特権と考えられています。日本でも明治初期の頃は、欧米人の講師から学ばねば先端の知識や技術が得られませんでした。その時代、学生たちは懸命に英語やドイツ語などの外国語を学んでいたのです。

——どうして現代の日本人に英語嫌いが多いのでしょうか？

これは一種の「先進国病」かもしれません。日本にいれば、非常に多くの有益な情報が日本語で入手できるので、外国語を学ばなくても事足りるのです。

日本と同様、先進各国では、母語で重要な情報が入手できます。まして、米国や英国では、日本以上に母語で足りてしまいますから、「なぜ外国語を学ぶのか」という動機面が希薄になってしまうのは無理もないことです。つまり、何も日本人だけが外国語を学ぶのが嫌いなわけではないのですね。でも、外国語を学ばないと、異文化に対して不寛容になる恐れがあります。その結果、起こった悲劇が9.11の事件です。

この象徴的な事件の後、「英語さえ知っていれば不自由しない」「外国語を学ぶ必要はもはやない」という考えは少なくなりました。さまざまな言葉や文化を知り、さまざまな経験を重ね、異なる文化や新しい出会いに適応していく力が必要だということを、欧米の言語教育の専門家たちも力説し始めています。日本も同じですね。

■幅広いアプローチで外国語習得の最適方法を探る

——最後に、現在の研究状況について教えて下さい。

私が最近採用しているアプローチは2つです。1つは、人が外国語を運用する際の脳の働きを可視化して解明しようとする「脳科学的アプローチ」。もう1つは、外国語を学ぶということを、情意、つまり気持ちや感情の動きとの関係から考える「心理学的アプローチ」です。

脳科学的アプローチとしては、光トポグラフィという装置などを用いて、外国語（英語）の様々なテキストを音読する際に、脳のどの部分が活性化するのか、また、情報処理の負荷が外国語ではどれだけ増えるのかなどを、母語の場合と比較して研究しています。心理学的アプローチとしては、効果的な動機づけの方法や学習計画・方法を、自己調整学習という枠組みの中で探究しています。

外国語学習の過程を数量化して分析し、証拠を示していく量的アプローチと、数量化できない部分をつぶさに拾い上げる質的アプローチ。この両方を使い、これからも外国語学習を実証的に調べ、そのデータを教材開発や教授・学習法の改善に生かしていきたい。これが目下の私の目標です。

光トポグラフィ装置の計測・操作部分

光トポグラフィ装置の頭部ホールダー（送光・受光器）部分

■研究最前線

遺伝子組み換えによらない不凍タンパク質の研究

氷結晶を制御する 不凍タンパク質の実用化

カイワレ大根由来不凍タンパク質で冷凍食品の品質改善

◉化学生命工学部 生命・生物工学科 微生物工学研究室
河原 秀久 准教授

冷凍食品の加工・保存の方法を一変させる画期的な「氷結晶制御物質」が発見され、実用化されることになった。冷凍食品のみならず、冷蔵状態でもデンプン老化抑制機能により、ご飯やパンなども従来の添加物を使用せずに、安全性の高い美味なものを市場に出すことができる。それを可能にした「不凍タンパク質」とは？

■再結晶化抑制タンパク質を求めて

化学生命工学部の河原秀久准教授（微生物工学研究室）らは、2012年3月12日に千里山キャンパスで、株式会社カネカとの共同研究成果について合同記者発表を行った。この発表は、河原准教授の研究グループがカイワレ大根から「不凍タンパク質」（antifreeze protein：AFP）を発見し、共同研究者である株式会社カネカが冷凍食品への利用を目的とするカイワレ大根エキスの本格販売を開始したことに伴って行われた。

遺伝子組み換え技術を利用せず、不凍タンパク質を抽出する製法での商業販売は世界初であり、安全・安心な食品への実用化が実現した。この成果に至るまでには、長年にわたる研究の蓄積があった。

河原准教授は、2000年から氷結晶の成長を制御する不凍タンパク質に注目し、冬野菜由来の不凍タンパク質の研究に着手した。

- •2002年2月　ワカサギ由来の不凍タンパク質遺伝子構造解析終了。
- •2005年7月　カイワレ大根に不凍タンパク質の存在を確認。
- •2007年4月　再結晶化抑制タンパク質の研究と評価方法の検討開始。
- •2008年9月　再結晶化抑制活性測定法の確立。
- •2008年11月　カイワレ大根の再結晶化抑制タンパク質精製。
- •2009年5月　カイワレ大根の再結晶化抑制タンパク質が植物種子タンパク質であることを確認。

さらに、2010年5月にエノキタケ細胞壁多糖に不凍活性を確認し、不凍機能の研究対象はタンパク質以外にも広がっている。

■カイワレ大根から不凍タンパク質を発見

――不凍タンパク質とは、どのようなものですか。

不凍タンパク質は、1969年に南極海に生息する魚（ノトセニア科）の血液内に不凍糖タンパク質として存在することが発見されました。以来、多くの寒冷地に棲息する生物種（魚、軟体動物、植物、昆虫、カビ、キノコ、地衣類、細菌などの微生物）からさまざまな構造や機能を有する不凍タンパク質の存在が明らかにされてきました。

不凍タンパク質の名称は、魚の血液および体液中の凍結温度が、南極海の海水の凍結温度より低下する現象から付けられました。

――カイワレ大根から不凍タンパク質を発見するに至った経緯は？

アメリカやカナダでは、魚や昆虫由来の不凍タンパク質を遺伝子組み換えにより生産する方法を試みてきました。私たちは、ワカサギから不凍タンパク質を効率よく抽出し、生産することが可能であることを突き止めました。

しかし、ワカサギの資源の問題や産地の違いによる活性の変化などの理由で、魚由来の不凍タンパク質の生産から日本特有の冬野菜を利用する方向に転じました。

冬野菜ではアブラナ科の野菜が多く、このうち日本で最も多く栽培されているのが大根で、収穫量のうち90％が漬物などに使用され、その大根葉は畑で捨てられていました。大根葉に含まれる不凍タンパク質に注目したところ、不凍タンパク質の活性を示すのは、11月から5月に収穫された大根葉のみで、1年を通じて安定的に不凍タンパク質を製造できないことが判明しました。

そこで、カイワレ大根に着目し、4年かけて研究した結果、カイワレ大根から得られるエキスにも不凍タンパク質の活性があることを発見し、その活性に重要なタンパク質を明らかにしました。

――カイワレ大根の不凍タンパク質は、大根葉のものとは異なるのですか。

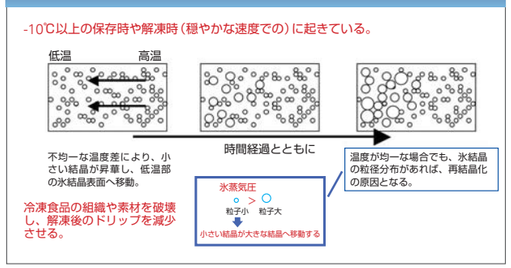
そうです。分子量の異なった2つのペプチドで構成されたタンパク質であり、種子中に貯蔵タンパク質として存在しているため、成長後の大根には存在せず、カイワレ大根にのみ存在します。これが、氷再結晶化抑制活性の重要な機能を果たすことが分かりました。

■氷再結晶化抑制活性（RI活性）測定法

――不凍タンパク質が冷凍食品の保存に必要とされる理由は？

食品素材（肉や魚介類）を冷凍庫で長期的に保存し、その後、解凍すると肉汁（ドリップ）が生じます。このため、解凍後に調理した場合、食感が悪くなります。ドリップが生じるのは、氷再結晶化現象が要因の一つです。氷再結晶化現象は、形成した氷結晶の蒸気圧の差によって冷凍時に起きます（図1）。

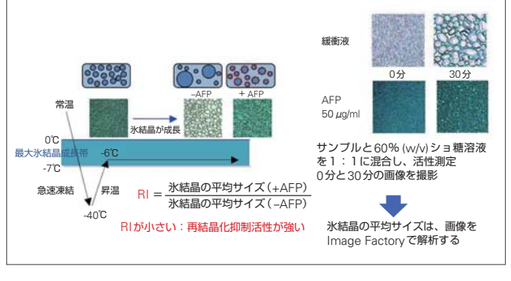
図1：氷の再結晶化現象



また、冷凍時の食品素材および冷凍食品の表面上で氷昇華現象が起きることで、袋が膨らむ、袋内に氷結晶が成長するなど、品質が劣化します。これらの現象を妨げる物質が、氷再結晶化抑制活性をもった不凍タンパク質です。

氷結晶は、水分子同士がクラスターを形成し、六角形構造を保った結晶です。0℃付近になると、不凍タンパク質の氷結合面のアミノ酸の周りに氷結晶クラスターと同じ六角形状に、水分子が集まり、不凍タンパク質が結合した氷結晶になり、機能が発揮されます。

図2：氷の再結晶化抑制活性測定法



――研究開発で特に難しかった点は？

冷凍したときに起きる氷の再結晶化という現象を数値化してとらえる方法を確立したことです。この氷再結晶化抑制活性（RI活性）測定法により、冷凍食品の品質改善が可能になりました。

RI活性は、サンプルと60％（w/v）ショ糖溶液を1：1に混合し、温度制御付き顕微鏡システムを用いて0分と30分での画像を撮影し、温度制御で測定が行われていました。

しかしながら、従来、画像の見た目でのみで同活性の有無を確認しており、魚由来の不凍タンパク質の活性との比較によって評価しているだけでした。私たちは、この方法では品質管理が行えないことから、RI値として数値化を確立することに成功しました。これにより、氷再結晶化抑制活性を指標にして品質管理ができるようになり、実用化に大いに貢献しました（図2）。

■冷凍麺に採用、冷蔵状態のデンプン老化抑制も

――この不凍タンパク質は、製品として市場に出ているのですか。

共同研究を行ってきた株式会社カネカは、カイワレ大根から抽出した植物不凍タンパク質をすでに販売しています。2012年3月から大手製麺メーカーの冷凍麺に採用され、本格販売が開始されました。これにより、世界で初めて、遺伝子組み換え技術を利用せず、植物から抽出する不凍タンパク質の実用化が可能になりました。

従来、冷凍うどんでは、霜が降り、表面が乾燥して白くなる現象が見られました。不凍タンパク質のエキスをわずかに添加することにより、表面の白濁も霜も見られなくなります。添加量はうどんの場合、粉に対して0.03％です。ですから、素材の味や色に影響しません。また、抽出工程に薬剤を使っていませんので安全です。

◉冷凍うどんの冷凍焼け防止効果

――今後の研究開発や実用化の展開について。

エノキタケ由来の不凍タンパク質と不凍多糖についても、長野県のベンチャー企業と共同研究を進めています。不凍多糖は冷凍たこ焼きと相性がよく、冷凍豆腐やフリーズドライ製品には、緑豆の不凍タンパク質がよいことも分かっています。

さらに、不凍タンパク質は冷凍以外に冷蔵でも、画期的な機能を発揮します。冷蔵状態のデンプン老化抑制があり、ご飯を冷蔵し柔らかい状態で保てます。また、パンにカイワレ大根エキスを乳化剤の代わりに入れることによって、水分を保持してしっとりとした状態を維持できます。添加物を使わず、安全性の高い素材で、おいしいパンが作れるわけです。

実は、デンプン老化が起きるメカニズムは、まだはっきりとは解明されていません。実際に老化抑制物質を使ってみて、なぜそうなるのか、アカデミックな研究へ落とし込んでいこうとしています。

Topics ■トピックス［学内情報］

別科・留学生寮併設の関西大学南千里国際プラザ——「共に学ぶ異文化交流」で国際化を推進

◉「関西大学留学生別科」開設

関西大学は新たな国際化構想の一環として、関西大学南千里国際プラザ（吹田市佐竹台1丁目）を新設し、2012年4月に「関西大学留学生別科」を設置した。別科では、日本語の語学力養成に加え、ICT（情報通信技術）を学習に活用して情報活用能力を養う。また、留学生寮も併設され、「共に学ぶ異文化交流」の拠点が誕生した。

▼日本語の能力と情報リテラシーを養成

関西大学留学生別科（日本語・日本文化教育プログラム進学コース）は、本学の学部・大学院や日本国内の大学・大学院への進学を希望する外国人に対し、日本語・日本事情・日本文化などを教授することを目的としている。

本別科では、ICTやe-learningを授業内外の学習に活用し、日本語力や学術活動の基礎となる能力はもちろん、各学生の総合的なコンピュータ・リテラシーや情報リテラシーも同時に養成する。

日本の大学・大学院は、日本語能力はもとより、知的活動を支える高度な論理的・分析的・批判的思考力と言語運用能力を兼ね備える学生を強く求めている。本別科では、基礎学力を養成するクラスや思考力を鍛錬するクラスなどを設けている。学生は自分の目的やニーズに合ったクラスを履修し、必要な学力を語学力とともに養うことができる。

・授業科目

◉第1群「日本語科目」
言語能力レベル（日本語習熟度レベル）に合わせた4技能（読む・書く・聞く・話す）の習得を目指すクラス。習熟度に合わせたレベルの日本語能力試験・日本留学試験対策も行う。

◉第2群「特別演習科目」
専門性の高い語学力やアカデミックスキルを養成するクラス。レポートや論文を論理的かつ学術的な文書で作成したり、プレゼンテーションなどの口頭発表のスキルを身につける。

◉第3群「日本事情科目」
日本で生活する上で必要となる基本的知識（一般的な習慣や行事等）を、講義やさまざまな活動を通して学び、知見を深める。

◉第4群「総合科目」
日本文化や日本社会についての知見を深める。日本留学試験の「総合科目（政治・経済・社会・地理・歴史）」の試験対策も行う。

◉第5群「基礎科目」
日本の大学・大学院で学ぶのに必要とされる科目（英語、数学、理科）の基本的な知識を身につける。

・修了要件

1年以上在学して、第1群および第2群から24単位以上、第3群、第4群および第5群から8単位以上の合計32単位以上の修了要件単位数を修得した者には修了が認定され、修了証書を授与する。

▼一般学生・地域住民も共に異文化交流

留学生別科の教育施設と新しい留学生寮が併設された南千里国際プラザでは、ほぼ全館で無線LAN が使え、寮室（全165室、すべて個室）でも全室、有線LANが使える。

また、互いに国際感覚を磨いてほしいとの観点から、関西大学の一般学生が「レジデント・アシスタント」として入居し、留学生の生活をサポートしたり、寮生が自然と交流できるようラウンジ・キッチンを共有する「ユニット制」を採用している。

南千里国際プラザは、別科生の学習の場であると同時に、一般学生や地域の住民の方々との交流の場としての機能も有している。「留学生・一般学生・地域住民による『共に学ぶ異文化交流』」をコンセプトに、本学および地域の国際化に貢献する。

1　教室棟は全館無線 LANを完備
2　寮内共有スペースのラウンジ・キッチン
3　建物中央部のウェルカム・パティオ（中庭）
4　トイレ・ユニットバス付きの寮室

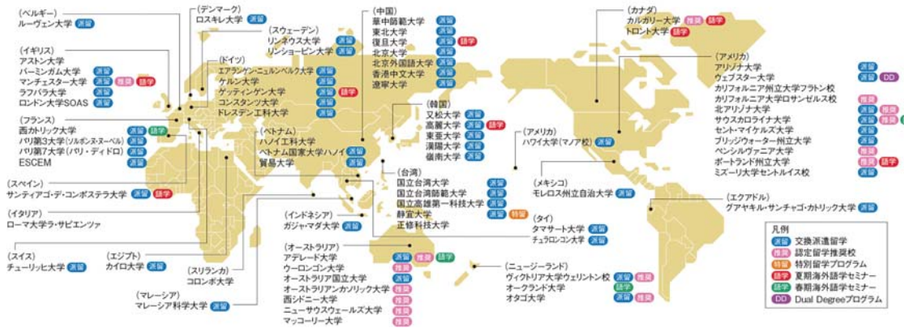
留学・国際交流を強力支援 関大から海外へ！海外から関大へ！

広がる海外協定大学などのネットワーク 多彩な留学・語学研修プログラムを提供

関西大学は、2012年5月現在、世界の62の大学と学術交流協定を締結し、研究者・学生の交流や学術情報・資料の交換など、活発な国際交流を展開している。そのうち56大学と学生交換協定を締結し、本学から派遣する交換派遣留学制度がある。

また、協定校以外の大学への認定留学制度、夏休みや春休み期間中に実施する約1カ月の海外語学セミナー（10カ国6外国語）、アメリカのウェブスター大学との共同学位（DD）プログラムなど、多彩な留学・語学研修プログラムを学生に提供している。

◉海外協定大学など（2012年5月1日現在）



海外に1研究センター、3オフィス設置 海外での情報発信を積極的に展開

▼関西大学日本・EU研究センター

創立120周年記念事業の一環としてベルギーのルーヴェン・カトリック大学（現 ルーヴェン大学）内に「関西大学日本・EU研究センター」を2006年11月4日に設置した。日本とEU相互の研究交流を促進するための共同研究、EUやベルギーの市民・学生に対する日本文化の紹介を事業目的としている。毎年、ルーヴェン大学で国際シンポジウムを実施し、隔年開催で国際シンポジウムと併せ「Japan Week」を開催している。

▼関西大学海外オフィス：上海・バンコク・台湾

上海オフィス

上海オフィスは2011年1月、復旦大学の日本研究センター内に設置。バンコクオフィスは2011年10月、チュラロンコン大学の石油・石油化学研究科リサーチサービスセンター内に設置。台湾オフィスは2012年4月、正修科技大学内に設置した。3大学はいずれも海外協定大学。教育・研究・社会連携活動の紹介、留学生別科をはじめとする学生募集活動、海外協定大学などとの学術交流、海外在住の本学校友との交流などの業務を遂行する。

台湾オフィス（左）とバンコクオフィス

南千里国際学生寮　2012年4月開館

日本学生支援機構（JASSO）の大阪第一国際交流会館1号館を関西大学が購入し、2012年4月に関西大学の国際学生寮としてオープンした（吹田市津雲台3丁目）。阪急千里線「南千里」駅から徒歩約10分、静かな住宅街の中にある。定員144人。

留学生だけでなく、関西大学の一般学生などが「レジデント・アシスタント」として共に生活する。寮室はすべて個室で、男女混住型だが、フロアは男女別。寮生の交流の場として多目的室や自習室などの共同設備も充実している。

文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞

研究部門　石川 正司 化学生命工学部 教授

世界最高性能の蓄電デバイス

理解増進部門　冬木 正彦 環境都市工学部 教授

日本初！専門英語eラーニングシステム

石川 正司 教授

冬木 正彦 教授

関西大学の石川正司化学生命工学部教授と冬木正彦環境都市工学部教授が、平成24年度文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞した。わが国の科学技術水準の向上に寄与することを目的とする科学技術分野の文部科学大臣表彰のうち、科学技術賞は文部科学大臣が顕著な功績をあげた者に対し表彰をするもの。石川教授は研究部門で、冬木教授は理解増進部門での受賞となった。今回の科学技術賞受賞者119人のうち、私立大学関係者は11人であり、本学の研究水準の高さを示すものといえる。

◉研究部門：石川正司 化学生命工学部教授「材料界面の積極的制御による蓄電デバイス高性能化の研究」

石川教授は、リチウムイオン二次電池や電気化学キャパシタという電気エネルギーをためるデバイスについて研究を行ってきた。リチウムイオン電池などは主に2つの電極とその間に存在する電解液と呼ばれる材料から構成されており、従来は各々の材料自体を工夫することが中心だったが、石川教授はナノ材料やイオン液体などの先進材料を適用し、それぞれが形成する「界面」を制御するという斬新なアイデアで、2つの世界最高性能を達成した。

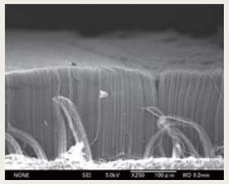
• イオン液体を適用した高安全性リチウムイオン二次電池

リチウムイオン電池用難燃性電解液 イオン液体

従来のリチウムイオン電池は可燃性の有機電解液が用いられており、電気自動車など大型用途に対して、その高性能化と安全性の両立が困難とされている。石川教授は有機液体にもかかわらず燃えないイオン液体のみを電解液として利用した安全性の高いリチウムイオン電池の作動に世界で初めて成功し、また、このイオン液体が形成する「界面」の性質から、従来以上の高性能電池が構築できることを発見した。

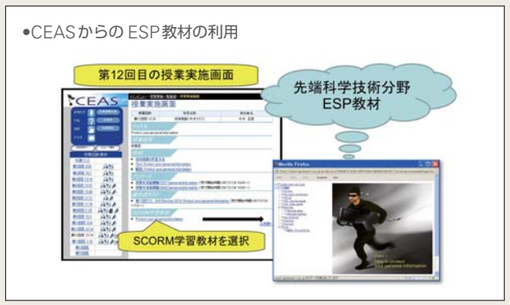
• 多層カーボンナノチューブを電極に用いた世界最高速度のスーパーキャパシタ

スーパーキャパシタは瞬間的に大電流を充電・放電できるので、大型の自動車や電車、電動クレーン、非常用電源として利用されている。石川教授は「多層カーボンナノチューブ」をきれいに並べた新しい電極を利用し、電極側からの特殊な「界面」を形成させることにより、従来のスーパーキャパシタの10倍以上となる世界最高速度を達成した。


電気化学キャパシタ用配向性カーボンナノチューブ電極

以上の技術は、電気自動車の普及の突破口となり、将来の自然エネルギー（風力や太陽光）への展開においても重要な役割を果たし、エネルギー問題の解決に大きく貢献できる。

◉理解増進部門：冬木正彦 環境都市工学部教授「国際競争力に資する専門英語教育システムの開発及び普及啓発」

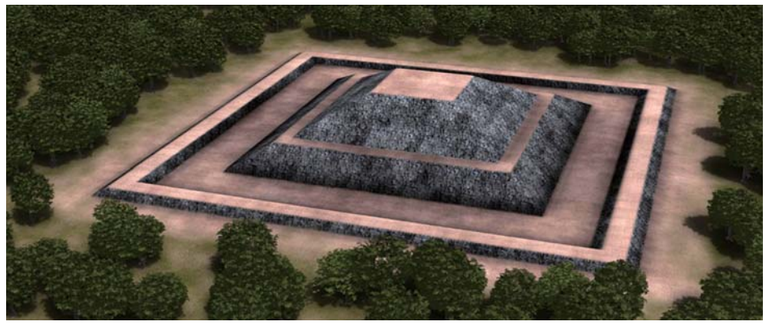


冬木正彦教授の受賞は、福井希一大阪大学大学院工学研究科教授と共同で、特に英語に弱いとされている理工系学生を対象に行った取り組みが評価された。

福井教授らは、最先端科学技術分野での英語によるコミュニケーションを学ぶ専門英語教育（ESP）デジタル教材を開発。また、冬木教授が中心となり、教材の配布、学習記録の回収、教員のアドバイスなど、授業と学習のサイクル形成を統合的に支援できるeラーニングシステム「CEAS」を開発した。

この研究成果により、ESPデジタル教材とeラーニングシステムの両者が統合され、日本初の専門英語eラーニングシステムが完成した。今後、国際競争力が求められる英語教育と学習の有機的なサイクルの普及が期待されている。

石舞台古墳復元CGムービーを公開　関大、明日香村、東大が共同制作


石舞台古墳のCG復元イメージ（明日香村・関西大学提供）

CGムービー制作に携わった米田 文孝 文学部教授

奈良県明日香村の「石舞台古墳」は、巨石を積み上げた石室で知られる観光名所。7世紀前半に築造され、蘇我馬子の墓といわれている。それはどのようにして築かれ、どんな姿をしていたのか―謎につつまれた石舞台古墳がCGを駆使して再現された。

石舞台古墳復元CGムービー完成発表会が2月29日、関西大学千里山キャンパスで開催された。CG制作は関西大学、明日香村、東京大学の三者共同で行われ、米田文孝文学部教授らの歴史考証をもとに、東京大学大学院情報学環の池内克史教授とアスカラボ（池内研究室から設立された大学発ベンチャー）が映像にまとめた。

このCGムービーは、近畿内約3,000校の小学校に副読本付きDVDとして配布するとともに、明日香村内の観光施設等で公開されている。また、インターネットでも見られる。関西大学では、iTunes® Store（www.apple.com/jp/itunes）内の専用エリアである「iTunes® U」に参加し、大学に関する動画コンテンツを無償で公開しており、このたび、iTunes® Uに石舞台古墳復元CGムービーを公開した。

豊能地区3市2町教育委員会と教員養成のための連携協定を締結

協定書に調印した豊中市教育委員会山元行博教育長、楠見晴重学長、池田市教育委員会村田陽教育長、箕面市教育委員会森田雅彦教育長（写真左から）

関西大学と豊能地区3市2町（豊中市、池田市、箕面市、豊能町、能勢町）の教育委員会は、教員養成のための連携協力に関する協定を締結することで合意に達し、2月21日に協定書の調印式を行った。

この協定は、教職員の資質向上と教員養成の充実を図るとともに、3市2町における教育および大学における教育・研究の充実、発展を目的としている。今後、学校ボランティア、学校インターンシップ、あるいは教職員の相互派遣等を通じて、各教育委員会と連携協力を進めていく。

「2012堺シティマラソン」に特別協賛 人間健康学部の学生らがボランティア

関西大学が特別協賛をした「2012堺シティマラソン」が4月29日、堺市の大仙公園・仁徳天皇陵周辺で開催され、2.5キロ～10キロの4種目に約7,400人の市民ランナーが参加した。本学からは楠見晴重学長が健康マラソン4.5キロコースにエントリーし、完走した。

会場に関西大学のブースを設け、血圧・血管年齢測定、敏捷性テストなどを実施した。また、人間健康学部の学生がボランティアスタッフとして多数参加し、ランナーへの給水サービスなどを行った。レース前には本学応援団バトン・チアリーダー部が軽やかな演技でランナーにエールを送るなど、大会を盛り上げた。

関西大学ウェブムービー第２弾を公開

関西大学ウェブムービーHPのトップページ

「考動力」を掲げる関西大学のキャンパスライフをリアルな映像で紹介する関西大学ウェブムービーの第２弾が、2012年4月から本学ウェブサイトで公開されている。約100秒のCM形式だった前作とは異なり、今回は約4分間のムービーを2本制作。関大生男女それぞれの1日を紹介する。BGMとして、新たに制作した本学オリジナル曲「関大のマーチ」(作詞:黒田秀樹、作曲：近藤達郎)を応援団吹奏楽部と文化会混声合唱団「葦」が演奏し、バトン・チアリーダー部やエキストラの学生らも出演して作り上げた。

監督は前回と同じく、本学社会学部卒業生で、三共リゲイン、資生堂「TSUBAKI」やマンダム「GATSBY」など、記憶に残るCMを作り続けるトップCMディレクターの黒田秀樹氏。ウェブサイトでは、完成したウェブムービーと併せて、撮影風景などのメイキングムービーも見られる。

http://www.kansai-u.ac.jp/global/guide/bta2/index.html

高槻キャンパス「情報演習棟（仮称）」地鎮祭開催

「情報演習棟（仮称）」の完成予想パース図

高槻キャンパスで4月17日、2013年1月竣工予定の「情報演習棟(仮称)」の建設工事地鎮祭を開催した。新たに建設する情報演習棟は、鉄筋コンクリート造り地上3階建てで、演習室57室、個人研究室3室、多目的室1室のほか、キャリアセンター、保健室、学生の作品・研究成果等の展示スペースなどを設ける予定。

演習室が充実することにより、卒業研究(4年次)はもちろん、専門演習(3年次)にも利用対象を広げ、2年間一貫した演習指導が可能になる。学部開設20年目の節目に建設される情報演習棟は、キャンパスの新しい顔として、本学部の今後の飛躍のシンボルになることが期待される。

障がいのある学生に対する修学支援窓口を全学体制で構築

関西大学では4月に、障がいのある学生に対する修学支援窓口を全学体制で構築した。これまでは各学部・研究科の窓口が個別に対応を行っていたが、「障がいのある学生に対する修学支援チーム」を設置し、全学的な修学支援体制を整えた。専属のコーディネーターとともに配置される学生支援スタッフは、必要な技術を身につけるため、2月から3月にかけて事前研修を受講、60人を超える学生支援スタッフが修学支援に取り組んでいる。

〈主な支援内容〉視覚障がい:テキストのデータ化、教材の点訳、支援機器の利用等／**聴覚障がい**：ノートテイク、ビデオ教材の文字起こし、手話通訳者の派遣等／**肢体不自由**：休憩室の利用、授業教室の調整、ノート作成補助等／**内部障がい**：車両の入構および駐車許可、受講時の配慮(着席位置、途中退席許可)等／**発達障がい**：障がいの状況に応じて、心理相談室と連携を取りながら個別に対応／**共通の支援**：個別相談、学内設備の改善、定期試験等の配慮の調整、授業担任者への配慮事項の伝達

第35回総合関関戦を開催

関西大学体育会と関西学院大学体育会による伝統の交流戦「総合関関戦」が、6月14日～16日、関西大学千里山キャンパスなどで開催される。総合関関戦は、両大学の体育会が良きライバルとして対戦し、親睦を深めることを目的に1978(昭和53)年から毎年開催。35回目を迎える今年は、前哨戦と本戦の36競技で勝敗を競う。通算戦績は、関西大学の16勝17敗。3年連続で敗北し、史上初の負け越しを喫している。今年は何としても勝ちたい、勝たねばならない年である。今年の全体テーマ(スローガン)は「邁進(まいしん)」。勝利に向かって、そして日本から世界の舞台へ邁進する選手たちを、強い気持ちをもって応援しよう。

Reed KANSAI UNIVERSITY NEWS LETTER
No.29 June, 2012
発行日・2012年(平成24年)6月6日
発行・関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680／TEL 06-6368-1121
http://www.kansai-u.ac.jp/

OSAKA MARATHON 2012
関西大学は大阪マラソン2012のオフィシャルスポンサーです。

関西大学